

8月28日（月）その62 綱曳きが盛んな島尻－地域行事への参加－

先週の新聞には、各地区の綱曳きの記事がたくさんあった。旧暦の6月24日前後に盛んに行われる。与那原大綱曳きや南風原町の津嘉山、喜屋武、兼城、照屋などの綱曳きのニュースがでかでかと載っていた。また糸満市真栄里、豊見城市伊良波、南城市大城、渡名喜、渡嘉敷などでの綱曳きの様子も新聞を賑わしていた。東風平や糸満などでは、旧暦8月15夜前後に行われる。「五穀豊穡」「大漁祈願」、「家内安全」、「無病息災」等を祈願する。

旧暦6月の綱を「カシキー綱（じな）」と言います。カシキー（カシチー）というのは、強飯（こわめし）・おこわのことです。新米のおこわを神に捧げて、刈り取った稲わらで綱を作り、子孫繁栄や豊作、厄払い、神への感謝等の気持ちを込めて、住民が総出で綱曳きをやったのです。300年前は、島尻地区も一面田んぼが広がっていたのですね。

男綱（うーじな）、女綱（みーじな）の両方の先端の丸いわっかのような「かぬち（かにち）」と呼ばれる所に、「かぬち（かにち）棒」を差し込んで合体させ綱曳きをやります。

メインの綱曳きに至るまでに、鐘や銅鑼、パーランクーを鳴らしながら踊りや歌で道を練り歩く「道ジュネー」。「サーサーサー」と声を出し、旗頭を上下に踊らせて自分たちの体力を自慢したり、歌や踊りで互いを挑発し合ったりする「ガーエー」などで盛り上げるのが一般的である。また綱の上に「シタク」と呼ばれる琉球国時代の歴史的人物に扮した若者達のがり、決戦の雰囲気盛り上げるところもある。

綱曳きの由来は、各地域ともほとんど同じである。「ある年、稲が不作のうえに害虫が発生し人々は餓死寸前であった。途方にくれた村頭が老人に相談したところ、村民総出で鐘、太鼓を打ち鳴らし、大声をだしながら綱を曳くようにと教えてくれた。この事をきいた王は、毎年綱を曳いて豊年祈願することを奨励した。」とだいたいこんな話である。（琉球国由来記、島尻郡誌）

この記述の真偽はよくわからないが、でも休みのない農民にとっても「琉球国公認の慰労会」は都合がよかった。地域共同体が揺るぎないものになっていった。刈り入れの終わった稲を住民総出で綱にすることで、地域の結束が強まる。年長者が若者に綱づくりの知識と技術を伝授し、若者達の腕力で綱を締め固める。また集落のしきたりや先輩方への接し方、神々へのお祈りの仕方等を教えてもらう。まさに村中の老若男女が相交わって、労働の喜び、躰、学習、コミュニケーションと、多くのことを学べる場であった。その過程で、おのずとリーダーが育ち、集落の秩序ができ、独自の文化が形成されていったのであろう。

残念ながら現在沖縄の多くの地域で、「地域共同体的な意識」が消えつつある。アパート等が増え、地域の中に名前も知らない人が増えてきている。

でも島尻地区は、古き良き時代のよさが残っていて、まだまだ地域の結束力が強いような気がする。だから「綱曳き」が、こんなに盛んなのであろう。

しかし子ども達に目を向けると、地域行事に参加する小中学生の割合がとても低い。ふるさとを愛する心を育てる上で、地域の歴史を知り、自然や文化を知り、地域の人を知ることが重要なことである。

ふるさとの行事も知らずに、ふるさとを愛する心など育つわけがない。

8月29日(火) その63 ジャネーの法則ー時間が経つのが早く感じる理由ー

8月25日の沖縄タイムス「茶のみ話」に、ある男性の「時間」という投書があって、大変興味深く読ませていただきました。「光陰矢のごとし」、「歳月人を待たず」、「少年老いやすく学成り難し」などを例に出し、大人になると時間が経つのが早く感じる理由を説明した「ジャネーの法則」なるものがあると、話を展開していた。

私も確かに小学生の頃は、一年間がうんざりするくらい長く感じられた。最近、「あい、もう8月も終わるサア、今年も後4か月。ヘーサヨ！（速すぎ）」という感じだ。ラジオでもそう言ってたし、皆さんもそう感じてるよね。別に大人の「1秒」が子どもの「1秒」よりも短いわけではない。

「ジャネーの法則」なるものを調べてみた。「ジャネー」というのは、19世紀のフランスの哲学者「ポール・ジャネ」という人の名前からきているようである。ジャネーの法則というのは、簡単に言えば「生涯のある時期における時間の心理的長さは、年齢の逆数に比例する」というものです。例えば、50歳の人間の感じる1年の長さは人生の50分の1ほどであるが、5歳の子どもの感じる一年の長さは、人生の5分の1に相当するというのだ。

$(5分の1) = (50分の10)$ だから、50歳の大人の感じる1年の長さの感覚は、5歳の子どもの10年に相当する。この法則の根拠は、どこにも示されていない。でも150年間も捨てられず語り継がれてきたということは、世界中の人が「だあるはずヨ」と思っているからなんでしょうね。

年を取ると仕事や対人関係で苦悩ややっかい事も増え、やることや考えることが多くなり、その忙しさが時間を短く感じさせているのかも知れません。それに比べると子どもの頃は、大人ほど悩み事もなく、やることや考えることがそう多くないので、時間がゆったりと流れるのでしょうか？

「♪思て通らば千里ん一里 又ん戻らばむとうぬ千里♪」（トゥバラーマ）
恋人に会いに行くときには、千里の道のりも一里のように感じる。帰るときにはもとの千里にもどる。つまり好きなこと、楽しいことに時間を使うときには、ワクワクドキドキして時間はあっという間に過ぎるわけです。集中して論文を書いているときなども、時間があっという間に流れたでしょう？

実はジャネーの法則を数式にして積分を使うと、80年の人生に対する体感的な長さを計算することができます。オホン！私は高校数学の免許も持っているんですよ。インテグラル $(1/x) dx$ ($x: 0 \rightarrow 80$) を計算すると、長くなるので黒板で説明しましょうね。……わかったかな？（笑）

この積分を使った計算の結果、80才まで生きるとして、9才で人生の50%の時間を体感、20才で68%、40才で84%、60才で93%の時間を体感していることになるそうです。

しかしジャネーの法則は、あくまでも「過ぎた時間は短く感じる」であって、「これからやってくる時間も短く感じる」ということではありません。過ぎた時間がどんなに早く感じられたとしても、皆さんの人生はまだまだこれからだということに変わりはありません。安心しましたか？（笑）

過ぎれば速く感じる時間だからこそ、迎える時間の一瞬一瞬を慈しみ大切にして、残りの人生を充実したものになりたいものですね。ジャネーの法則によると61才の私は後7%。7%を体感し終えたらジャネー。（笑）

8月31日（木）その64 職員のよさを束ねて学校経営（案）

私が2才の頃B円を握りしめている写真がある。B円を使った記憶はない。物心ついたときのお金は、アメリカドルだった。昭和47年に日本復帰したときのお札は、聖徳太子の1万円と5千円札、伊藤博文の千円札、岩倉具視の500円札だった。（昭和57年白銅貨の500円玉が発行された。）

昭和59年に日本のお札の図柄が刷新され、新札は1万円札が福沢諭吉、千円札が夏目漱石だったが、問題は5千円札である。「誰？この丸めがねのおっさんは？」新聞で最初に新札の肖像画を見たときに思った。新渡戸稲造（にとべいなぞう）という名前を聞いても、誰なのか全くわからなかった。

私はカルチャーショックに似たような衝撃を受けた。それで新渡戸稲造が書いた著書「武士道」などを3～4冊本屋に注文して買って読んだ。

クラーク博士の札幌農学校を卒業してアメリカに移住し、アメリカで英語で『武士道』を書いてベストセラーになった人だそう。ヨーロッパでもベストセラーとなり、パリ万博の頃の空前の日本ブームに一役買った。その後、新渡戸は国際連盟の事務次長になり、帰国後いくつかの大学の学長を勤めている。「へえ、120年前に坂本九よりもすごい国際人がいたんだ」と思った。

新渡戸稲造の書いた「世渡りの道」という本の中に、面白い話があった。桃太郎の犬、さる、きじを例に出した上で、「平生仲のよくないものでも、互いにその長所を発揮し、その短所は他の力を持って補うようにして、社会は完全となる。自分と意見の違うものを排除するのではなく、むしろ性質の違う者を加えて、その長所を発揮させて、協力するよう努めるべき…」とあった。私はこの話に衝撃を受けた。

そう言われたら、桃太郎はどうしてサル、キジ、犬を家来にすることができたのだろうか？と考えた。「きびだんごだ！」。桃太郎はきびだんごを与えて、彼らを家来にしたのだ。そしてそれぞれの長所を発揮させて、一致団結して鬼退治という偉業を成し遂げたのだ。「きびだんご」とは、ある意味「リーダーシップのことだ」と思った。

私はその後の教員生活で、例えば「学級経営のきびだんご（リーダーシップ）とは何だろうか？」などと考え続けた。そして校長になったとき「校長のきびだんご」とは何だろうか？と考え、「職員のよさを束ねて学校経営をやる！」ことだと思った。校長には人事権はない。だから与えられた職員に頑張ってもらうしかない。職員の欠点やできないことに目を向けるのではなく、全職員によさを発揮してもらえば、きっと学校は変わっていくと考えた。ちょうど桃太郎がサル、キジ、犬の長所を最大限に活かして、一致団結して鬼退治をやったように。

「凡事徹底」。2つ3つのことを本当に全職員で一致団結して推進していくとき、学校は変わる。臨任も本務も、本当に全職員が徹底して実践できれば、間違いなく学校は変わっていく。確かに一人一人の教員の力量には差がある。力の足りないところを指摘して叱咤激励するよりも、よさを発見してほめて、そのよさを発揮してもらうことが重要であると考えた。校長たるもの、もっとぐいぐい職員を引っ張るべきとする考えもあると思うが、私は6年間このことを徹底して実践してみて、絶対に効果があると確信している。

憎しみが人を動かすこともあるが、人を動かす一番大きな力は、「感動」である。感動すれば、人は動く。